

「救い主はダビデの子!？」

(マルコ12:35-37/マタイ22:41-46/ルカ20:41-44)

挽地茂男

2019.5.5 日本基督教団千歳丘教会礼拝



聖書に出てくる〈救い主〉の呼び方について、代表的なものについて少し整理をしておきましょう。まず〈メシア〉という呼び方です。メシアとはヘブライ語で「油注がれた者」を意味する言葉です。それをギリシア語に訳すとキリスト(クリストス Χριστός / 新共同訳は「メシア」と訳)となります。「油を注ぐ」という行為は、古代オリエントの即位儀礼において王の頭にオリーブ油を注いだ習慣に由来します〔油は神の霊、力を象徴〕。ですから旧約聖書に現れるメシア(油注がれた者)という語は、ほとんどが王に関して用いられています。元来メシアとは、外敵や国難から国民を救う、軍事的・政治的救済者のことなのです。最初に油

注ぎを受けた王はイスラエル統一王朝の初代の王サウルです。しかし王に関するメシアの用例のほとんどは、第二代の王ダビデとその子孫に集中しており、後代のメシア預言(メシアが到来するという預言)では、正しい治世をもって治める王の理想型(範型)をダビデに求める傾向が強くなり、メシアを〈ダビデの子〉(ダビデの子孫)と呼ぶ呼称(呼び方)が多用されるようになります。

しかし王国が分裂し、それぞれの王国が滅亡すると〔722BC 北イスラエル王国滅亡、586BC 南ユダ王国滅亡〕メシア思想には、バビロン補囚の悲しい運命がもたらした著しい変化が見られます。補囚期後期には〈苦難の僕〉というメシア像が見られるようになります。〈苦難の僕〉とは民に代って





ペルシア王キュロス2世

罪の赦しのための贖罪を成就するメシアのことです(イザヤ書)——このメシア像が初期のキリスト教において、主イエスの十字架の苦難を理解するのに重要な役割を果たすことになります。

やがてペルシア王キュロス〔イザ45:1では、彼は異邦人なのに「シメア」と呼ばれています〕によってバビロニアが滅ぼされ、バビロニアから帰還した民は、当初政治的な完全独立を目指してメシア運動を展開しますが、政治的状況(ペルシア王キュロス)は王の擁立を許さず、神殿の再建とユダヤ教の確立のために祭司をメシアとして立てることを余儀なくされます。〔ヘブライ人への手紙の「大祭司キリスト論」はこの系統のメシア理解を示す。〕

さらに補囚期以後、第二神殿時代(前539-後70)末期(1-2cBC)のユダヤ教黙示思想に至ると、〈人の子〉というメシアの呼び方が出

てまいります。このメシアは地上的な政治・軍事によって事態を開く望みが失望に変わるとき、神が直接的に介入し、天来の力によって一挙にすべてを一新してくれるという夢に近い待望が浸透していくことになります。その輝かしい未来をもたらす終末的な救世主が〈人の子〉と呼ばれます。ですから〈人の子〉は、地上的・政治的・王的なメシアに対して天的・超越的なメシアの性格が優勢となります。〈人の子〉という言葉は「人間」という意味でも使いますが、黙示思想に見られる〈人の子〉とは、最初の人アダム〔アダムはヘブライ語の一般名詞で「人」を意味する〕の楽園的祝福を回復する救世主をさしています。このような終末的メシアは終りの日に到来し、死者を復活させて最後の審判を行い、新天新地を創造してメシアの王国を樹立します。まず最初に、メシア、ダビデの子、苦難の僕、人の子という呼び方を整理しておきましょう。

ローマ帝国がイスラエルを実質支配していた主イエスの時代、その支配の非抑圧的状況から解放をもたらす「メシア」が待望されて

いました。そのメシアは当然ローマという軍事大国の支配からの解放を求めるのですから、軍事的・



政治的メシアすなわち「王的メシア」が待望されていたのです。熱心党の運動は実はこの

「王的メシア」への待望を原動力とする反ローマの武力闘争だったのです。この「王的メシア」つまり〈ダビデの子〉への待望の高まりを背景に主イエスは登場します。イエスの死後に成立する新約諸文書の中で、主イエスは〈ダビデの子〉とも〈人の子〉とも呼ばれています。しかもご自分の苦難を何度も預言します。主イエスの心の中には自らを〈苦難の僕〉と重ねて見る見方が生前から明確になっていたと考えられます。後の教会はこの〈苦難の僕〉としてのメシアの姿を——先ほど申しまし

たように——主イエスの受難の中に見出したのです。

本日の聖書箇所のマルコ 12 章 35 節で、主イエスは律法学者たちのメシア理解に疑問を投げかけて言います。35 節。

12:35 イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか」。

この箇所をもう少し正確に直訳しておく、「イエスは神殿の境内で教えていたとき答えてこう言われた」となります。新共同訳ではこの「答えて」が訳出されていません。主イエスの語っておられる言葉が、議論の中での、少なくとも対話の中での応答（ἀποκριθεὶς）としての発言であることを、おさえておくことが必要です。この箇所の直前の聖書箇所(12:28-34)が「もはや、あえて質問する者はなかった」(34 節)という言葉で終わっているの

マルコ12:35	マタイ22:41-43a	ルカ20:41
◆ダビデの子についての問答 12:35 イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。  「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。	◆ダビデの子についての問答 22:41 ファリサイ派の人々が集まっていたとき、イエスはお尋ねになった。 22:42 「あなたたちはメシアのことをどう思うか。だれの子だろうか。」彼らが、「ダビデの子です」と言うと、 22:43 イエスは言われた。「では、どうして	◆ダビデの子についての問答 20:41 イエスは彼らに言われた。 「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。

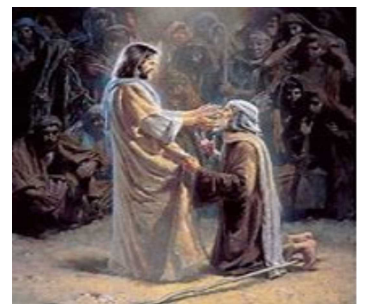
で、新共同訳はこの「**答えて**」を訳出しなかったのだと思います。しかし主イエスの言葉が、目の前にいる質問者に対する応答でなかったとしても、その言葉は人間の心との応答関係の中で意味をもってくる発言なのです。あえて質問を試みる者はいなくなっても、人の心には問いが残っているのです。イスラエル民族の歴史に深く根ざし、その民心につねに去来するメシアに関する希求と問いに対峙しつつ、主イエスは変わらず人々の心との応答関係の中で教えておられるのです。

律法学者は「**メシアはダビデの子だ**」と主張していました。彼らも王的なメシアを待望していたのです。イエスを目の前にした彼らの心の中には、加えて人々の心の中にも、当然、「この人は——目の前のあなたは——ダビデの子なのか」とい

う疑問が浮かんでいたことでしょう。神殿境内から行商人や両替商を追い出し（宮清め）、イスラエル神政政治の牙城となるサンヘドリンの重鎮たちと論戦を交えて論破するのだから、メシアであってしかるべき、苦しみを特徴とする〈苦難の僕〉でも、終末的な〈人の子〉でもなく、力に満ちた〈ダビデの子〉でなくてはならない。

「**どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか**」という質問は、人々が是としてきたメシアに関

する通説に揺さぶりをかける質問だったのです。エル



サレムに入城する直前、盲人バルティマイが「**ダビデの子よ、わたしを憐れんでください**」（10:48）と叫んだように、人々には主イエ

マルコ12:36－37	マタイ22:43b－45	ルカ20:42－44
12:36 ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。 『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』 12:37 このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」	ダビデは、霊を受けて、メシアを主と呼んでいるのだろうか。 22:44 『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい、／わたしがあなたの敵を／あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』 22:45 このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのであれば、どうしてメシアがダビデの子なのか。」	20:42 ダビデ自身が詩編の中で言っている。 『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』 20:43 わたしがあなたの敵を／あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』 20:44 このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」

スがそうあってしかるべきだと思えたのです。またエルサレム入城



の際に民衆が「**我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ**」(11:10)と

歓呼したように、いまやそのダビデの子イエスが国を再興される、と人々は考えたのです。

主イエスは、民衆が口にする「ダビデの子」キリスト論の発信源が、律法学者の聖書解釈にあることを知っておられました。神は旧約聖書において、メシアはダビデの子孫として生まれると約束しておられました(サム下7:12~13、イザ9:7、エゼ34:23~24参照)。捕囚を体験して以降、イスラエルの民の間には、メシア待望が高まっていきました。人々が最も強く待望したメシアは、理想の王であるダビデの子孫として現われ、イスラエルを軍事的・政治的に解放してくれるメシアでした。共観福音書には、人々がイエスを「ダビデの子」と呼びかけている例がたくさん出てきます。しかし福音書は、(マタイ福音書のように)主イエス

がダビデの子孫であることを認めつつも、「ダビデの子」キリスト論のもつ軍事的性格、政治的性格を巧みに避けています。

律法学者の主張と共に人々の間に流布した、〈ダビデの子〉というメシア像に対する、主イエスの反論はこうです。36-37節a。

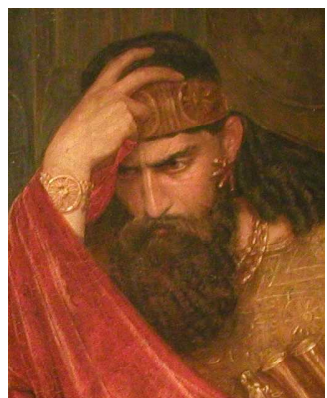
12:36 **ダビデ自身が聖霊を受けて**言っている。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』12:37 このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。……

主イエスはダビデ自身の発言を取り上げ、「**ダビデ自身が聖霊を受けて言っている**」と始めます。つまりダビデ「聖霊を受けて」語ったとすることによって、このダビデの発言には神的な権威がある、と主張しているのです。こうしてダビデ発言の権威と確実性を担保しておいて、詩編が引用されます。詩編110編1節です。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足も

とに屈服させるときまで」と。』ここに登場するのは三者(三人)です。「わたし」として登場するこの詩編の作者のダビデ。そのダビデが「わたしの主」と呼んでいる者がいて、さらにそのわたしの主に語りかける「主」がおられる。



ヤハウェ=アドナイ=わが主



サウル王



サウルとダビデ

『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』そしてこのサウルが最初の

メシア(油注がれた者)としてイスラエルを外敵から救うのです。そして主イエスの質問が、これに続くのです。37節。「12:37 このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」この詩編の言葉を根拠に「ダビデの子」キリスト論の論理矛盾を突くことによって、主イエスは、メシアが「ダビデの子孫」ではないと主張するのではなく、「**どうしてメシアがダビデの子なのか**」を再考せよ、と仰っているのです。真の王とは、いかなる王か、よく吟味せよと仰っているのです。〈ダビデの子〉という呼称に直接的に結びついた軍事的・政治的救済者というイメージを、主イエスは避けておられるのです。〔〈ダビデの子〉の再吟味は、マタイによる福音書の系図で見事になされている。ここでは詳述を避ける。〕

ここでわたしたち読者は再度、メシア(キリスト)つまり救い主とは何者なのかを問われているのです。今日の箇所は短い箇所ですが、マルコ福音書のメシア理解



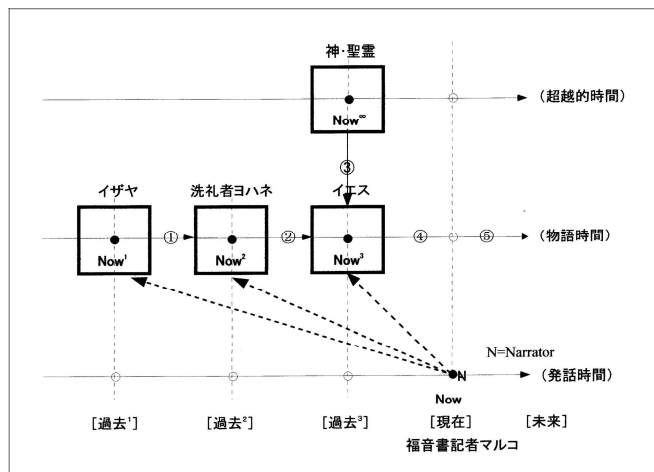
の全体と関わっているのです。そこでもう一度、主イエスの洗礼の場面に立ち戻ってみたいと思います。1章9－11節。

1:9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。1:10 水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。1:11 すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

(新共同訳)



この記事には、洗礼に付随して、主イエスが神から来られた方、言い換えれば、主イエスの神的起源を示す天からのしるしが描かれます。主イエスが洗礼を受けられると、まず①天が裂けます。そして



②霊〔聖霊〕が鳩のようにイエスに降ります。そして③天来の声が聞こえてきます。これらの事柄によって、イエスの生涯に超越的な垂直の次元が明確に導入されます。ヨハネから洗礼を受けヨルダン川の水から上ったイエスに、天から下ってきます。裂けた天から鳩のように下る霊も、そして天来の「あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ」^{*1}という神の〈声〉も、主イエスの身分を保証するのです。そして主イエスのこの後の活動が神に起源すること、神的起源を持つことの証明なのです。

この天来の声は、マルコの混合引用です。つまり①詩編2編（特に7節）と②イザヤ書42章1節が混合されています。この二つの

*1 Σὺ εἶ ὁ υἱός μου ὁ ἀγαπητός, ἐν σοὶ εὐδόκησα. 新共同訳の「わたしの心に適う者」を、単純に直訳して、「わたしはあなたを喜ぶ」と訳しておきます（この部分はイザヤ書からの引用ですが、70人訳イザヤ書も同じギリシア語の単語を使っていますので、その日本語訳にあわせておきます）。

うちの詩編第2編は、「王の詩編」とよばれる詩編で、王の即位式で読まれたものです。詩編2編7節はこうなっています。

主はわたしに告げられた「あなたは[わたしの]子。今日わたしがあなたを生んだ」^{*2}

この詩編は、王の即位式に際して—そこには当然「油注ぐ」という行為も入ってくるのですが—祭司と王と会衆とが交唱〔交互に朗読〕した詩編と言われています。引用されているのは王が朗読する部分です。「主はわたしに告げられた『あなたは[わたしの]子。今日わたしがあなたを生んだ』」。王はその即位に際し、神を父としその神が生み出した「神の子」と宣言されます^{*3}。もちろんローマ皇帝や歴史上の王たちのように、自分の意のままに、人の命に至るまですべてを左右する権力の持ち主としての神の子ではなく、父なる神との緊密な関係において、国政まつりごと(政)を行うという意味での神の

子なのです。

この詩編が、もう一つの聖書箇所と融合されます。イザヤ書42章1節です。マルコの使う70人訳ギリシア語聖書では次のように記されています。

見よ、わたしの選んだわたしの僕/子。わたしの心が喜ぶわたしの愛する者。わたしは彼にわたしの霊を授ける。そうして彼は異邦人に審きを告知らせる^{*4}。

ここに登場するのは、「主の喜ぶ、主の愛する僕/子」です。彼には霊が授けられるとも書かれています。このイザヤの言葉は終末的な「神の僕の派遣」の言葉なのです。重要な要素は四つ、(1)神の選びと、(2)神の寵愛〔神がこの僕/子を愛していること〕、(3)霊の授与、(4)異邦人への告知、の四つです。

マルコ
がこの混



*2 Κύριος εἶπεν πρὸς με Υἱός εἰ σύ, ἐγὼ σήμερον γεγέννηκά σε. [わたしの] は原文にはない補筆。即位の「油注ぎ」をもって王は「メシア」であることを宣言される。元来「メシア」とは王のことを指す。王は国民を国難から救い、平和をもたらす救い主でもある。この表現は、初期キリスト教の信仰告白の定式〔定まった形〕として伝承段階で成立していた可能性もあります。

*3 旧約聖書でも神を「父」と呼びます。

*4 70人訳の以下の本文を私訳。Ἴδου ὁ παῖς μου ὃν ἠρέτισα, ὁ ἀγαπητός μου εἰς ὃν εὐδόκησεν ἡ ψυχὴ μου· θήσω τὸ πνεῦμά μου ἐπ' αὐτόν, καὶ κρίσιν τοῖς ἔθνεσιν ἀπαγγελεῖ. (イザヤ42:1)。新共同訳「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ／彼は国々の裁きを導き出す。」「僕」と訳されている言葉〈παῖς〉は、「僕」とも「子」とも訳される。

合引用に見ているのは、主イエスの受洗が旧約的な「王の即位」とイザヤの終末的な「神の僕の派遣」を意味しているということです。「王でありかつ僕である存在」「僕である王」は新約聖書の救い主の独特の性格をよく現しています。神の子イエス・キリストは、「僕に即位する」という言い方もできます。王として即位して立ち上がったその姿は、僕そのもの、仕える者の姿をしているのです。しかしこれ以後、マルコの言おうとするもう一つの重要な点が、マルコの文脈との関係で明らかになっていきます。つまりマルコの力点は、伝承的な「王の即位」と「神の僕の派遣」というテーマから、その中に包み込まれた「神の子」のテーマに移動していきます。マルコ福音書の展開は、実際にはこの「神の子」の理解を軸にして展開するのです。そしてこのテーマは、いくつかの展開を経て〔詳述を省略〕、15章39節のローマ兵の告白において頂点に至ります。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神

の子だった」と言った。

主の僕は―その生涯の全体をとおして見れば―この十字架に向かって即位したのです。しかもローマの百人隊長にとって「神の子」とは直接的にはローマ人の王、ローマ皇帝なのです。十字架に絶命したイエスをさして、ローマ兵の口が「神の子」を告白します。これは、古代には類例のない「神の子」理解です。古代世界においては、国を支配する王が神と呼ばれたり、神の子と呼ばれたりしています。アレクサンドロスやローマ皇帝アウグストゥス、我が国の近代史においては天皇であります。

マルコのメシア(キリスト)論は、通常の神の子とは違う、受難の〈神の子〉イエスの理解に向かっているのです。第1章に出現した神の子イエスは、福音書の前半では、奇跡の累積によって神から派遣されたメシアであることを実証します。8章27－30節でペ



トロが「あなたは、メシア(キリスト)です」と信仰を告白する場面から、前半の奇跡のテーマは、一転して、受難のテーマへと転換します。8章、9章、10章と3回に及ぶ受難予告、11章のロバに乗ってのエルサレム入城によって、軍馬にまたがって入城する王の姿を変形させ、軍事によらずに平和をもたらす王の姿を明確に示すのです。そして今日の箇所は、民衆の内に一般化した〈ダビデの子〉としてのメシア待望に修正を加え、14章から始まる受難物語を目前に控えて、メシアの姿から軍事的メシアの姿を拭い去ってしまうのです。

主イエスに敵対する主張を繰り返した律法学者たちも、サンヘドリンの重鎮たちやユダヤ教の宗教指導者たちもすでに主イエスの前から姿を消しました。すでに主イエスの議論の相手はいなくなりました。ただ群衆だけが、主イエスの教えに耳を傾けています。37節b。

12:37 …群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。

この群衆の喜びが底の浅いものであることを、わたしたちは知っています。やがて主イエスを「十字架につけろ」と叫ぶのも彼らだからです。真の喜びは、十字架の愚かさと躓きを越えて、復活の主に出会うところにあるからです。わたしたちの救い主は生きておられる。新しい一週間も主と共に歩んでまいりましょう。

2019.5.5 日本基督教団千歳丘教会礼拝



マルコ12:37b	マタイ22:46	ルカ20:41-44
大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。	22:46 これにはだれ一人、ひと言も言い返すことができず、その日から、もはやあえて質問する者はなかった。	 ヘロデ大王の神殿の丘

12:35 イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。

12:36 ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』 12:37 このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。

12:35 Καὶ ἀποκριθεὶς ὁ Ἰησοῦς ἔλεγεν διδάσκων ἐν τῷ ἱερῷ, Πῶς λέγουσιν οἱ γραμματεῖς ὅτι ὁ Χριστὸς υἱὸς Δαυὶδ ἐστίν;

12:36 αὐτὸς Δαυὶδ εἰέν τῷ πνεύματι τῷ ἁγίῳ, Εἰκύριος τῷ κυρίῳ μου· Κάθου ἐκ δεξιῶν μου, ἕως ἄν θῶ τοὺς ἐχθρούς σου ὑποκάτω τῶν ποδῶν σου.

12:37 αὐτὸς Δαυὶδ λέγει αὐτὸν κύριον, καὶ πόθεν αὐτοῦ ἐστὶν υἱός; καὶ (ὁ) πολὺς ὄχλος ἤκουεν αὐτοῦ ἠδέως.